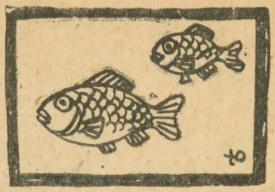

天皇と文樂

木谷蓬吟

どこ見ても涼し神の灯佛の灯とは京の東山をよんだ子規の句である。その灯と、この灯とは、全く趣を異にするが、足利時代の末期應仁の亂以後には、三條の大橋から、はるかの北の、御所内侍所の燈火がかすかにチラホラ見えて、道行く人を泣かしたといふ、皇室式微の最もひどい時期があつた。

紫宸殿の椽側には近所の兒童が上つて來て、砂遊びをする、左近の橘の下に茶店がかゝる。天皇や公卿衆揮筆の色紙や短冊が、竹籠にぶら下げられて、裕福な町人の金米と交換された。天皇崩御その御大葬さへ出來なかつた。正親町天皇御即位の式典が、經費の都合で三ケ年延期されたことは、史乘著名な事實である。

人形淨瑠璃と天皇との連鎖は、恐らくこの頃から結ばれたものだと想ふ。勿論、御即位當時には、まだ人形淨瑠璃はこの世に生れて出てゐない。永祿五年に、やつと琉球から蛇皮線が輸入、これが今の三味線に改造され堺の法師たちから、織田信長か豊臣秀吉かの手を經て（この二說あるが多分後者か）正親町天皇に献上した。天皇は御趣味饒かな御方と見え、傀儡師の操り人形を、しきりに御上覽遊ばされた記錄が殘つてゐる。

前に叙べた皇室式微時代には、御所の塀はくづれたまゝ、垣は破れたまゝであつたから、傀儡師などの大道人が、無遠慮にも築地の破れから草鞋足を踏ん込んで、人形の所作を御覽に入れて御慰め申し上げた。「永祿天正頃には大内に戎かき參りて能の所作など天覽に達した」といつた意味の記錄があり、爾來慶長四年までに少くとも十五回は御上覽に供したらしいことは「御湯殿上記」にも見える。天皇と人形淨瑠璃は、先づ人形によつて握手されたと云へよう。

この期間にあつて、かねて孤立的で影の薄かつた淨瑠璃節と、新輸入の三味線と、また殆ど同時に傀儡師の新進組と、この三體連盟が功を奏し漸を追て發展の途に上つた。

京の淨瑠璃太夫目貫屋長三郎といふて、淨瑠璃三味線の開祖澤住檢校の門人が、自分で「都めぐり」の一段を新作して、引田重太夫の人形と合せて成功、後陽成院の御前で上覽に達し、重太夫は淡路掾を受領した。これが操師の官名受領の始めで、次いで監物が河内介を受領したのが太夫受領の最初だと古記錄が示してゐる。

正親町天皇は、初め大道藝人の放浪操り人形に興味を持たれ、專ら娯樂的に御觀覽あつたらしいが、次代の後陽成天皇になつては、むしろ藝術的な御見地から御奬勵になり御愛護を給はることになつたのではないかと愚考する。禁中に於ける斯うした記錄は、知るに頗る困難で、史料饑饉を歎く他はないが、たゞ、慶長十八年、十九年の「時慶卿記」「言緒卿記」という兩卿の日記中に、太内操りの記載を見受けるから轉揭する。

「時慶卿記」慶長十八年二月十六日、天曇、雪少散、寒風、院御所ヨリ可二參上一御使アリト、夷舁在之、爲見物也、參上、事外寒、內藏頭ト兩人也、御銚子出、一路御參也、夕ニハ番所ノ臺所ニテ有食、先刻御酒給時ニ、上皇（筆者註後陽成院）出御ニテ、御酒一ツ可給旨仰也、十番アリ慶長十九年九月廿一日、雨天、院參、飯後阿彌陀胸切（筆者曰胸割の誤）ト云曲ヲ仕、夷舁ノ類ノ者推參トシテ、於御庭緞子幕等ヲ引廻シテ有曲、奇意ノコト也、又、加茂、大佛供養、高砂等ノ能ヲモ仕候（以下略）

他に「言緒卿記」もあるが省く。右によつても、緞子幕を繞らせての人形舞臺や當時第一の流行狂言「阿彌陀胸割」の天覽などが明かに知ることができる。

後陽成天皇は、實に斯道の最大愛護者として特記す可き御方だと信じる。官名受領の榮典、御簾の下賜なども、この時代の所產であらう。元祖竹本義太夫、若太夫、政太夫の三巨匠が、それ〴〵國名受領勅許の際は、孰れも禁中に咫尺し奉つて演技天聽に達したことは確信されてよい。若太夫が豐竹越前少掾受領の論旨の奧に、「梁塵軒」と宸筆を賜つたを、彼は已が作者としての筆名に用ひてゐる。靈元上皇が、近松の「最明寺殿百人上臈」の道行、雪の文藻を推讃されたことは、餘りにも著明な話である。また、獻上本が、名詮自性の由來を持つことや。現在尙文樂座の床の上部に、わづかに裝飾的名殘を止めてゐる翠簾の濫觴など。すべて天皇と人形淨瑠璃の結緣を物語る史料である。